

副院長退任のご挨拶

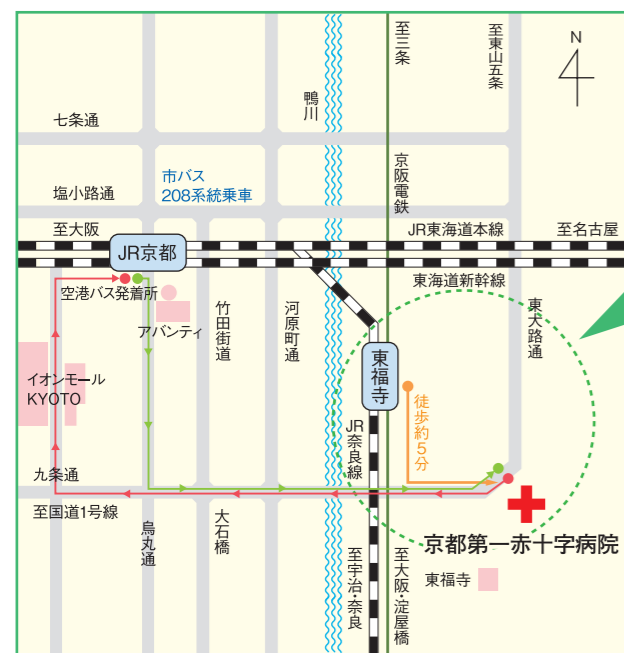
副院長 塩飽 保博



令和5年3月31日をもちまして定年となり、副院長の職を退任することとなりました。平成2年4月に当院に赴任後33年間、各病院・医院様の支えにより、外科医を続けて来ることができました。あらためて、御礼申し上げます。赴任当初は、食道癌を中心とした上部消化管手術、炎症性腸疾患を中心とした下部消化管手術を行ってまいりましたが、平成20年外科部長に就任後は、主に後進の指導を行ってまいりました。また臓器別にスタッフの担当を振り分け、より専門的な医療を提供できるよう努めてまいりました。平成29年に副院長に就任し、メスを置き、医療安全、手術室運営に加え、前半は救急・周産期、働き方改革、後半はがん診療の仕事を行ってまいりました。病院が良い方向に向かうように微力ながら尽力してまいりましたが、後半はやはりコロナに振り回された感があります。また、病診連携の先生方とのより密な関係を保つ予定でありましたが、こちらもコロナ禍でままならず、非常に残念に思います。今回定年退職の予定をしておりましたが、諸事情により消化器外科部長継続の依頼があり、1年ほど引き続き部長として勤務させていただくこととなりました。これからはアフターコロナとして、池田院長を筆頭に病院の活性化を図っていかねばいけませんので、一外科医として心機一転頑張っていきたいと考えております。副院長時代に導入したロボット支援手術ダ・ベンチやナビゲーションシステムなどを用い、6年間務めた医療安全推進室室長の経験を生かし、より安全・安心・誠実な医療を提供していきたいと思っておりますので、今後ともご支援のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

Access to Japanese Red Cross Kyoto Daiichi Hospital

当院へのアクセス



電車をご利用の場合
JR奈良線、京阪電鉄…「東福寺」駅下車、徒歩5分

バスをご利用の場合
市バス202、207、208系統「東福寺」バス停下車

車をご利用の場合
【奈良、大阪方面から】…京都南IC出口、国道1号線を北へ約2.5キロ京阪国道口を東(右折)へ、九条通りを約2.5キロ
【山科、大津方面から】…国道1号線を西進、東山五条交差点を南(左折)へ、東大路通りを約2キロ
【京都駅付近から】…竹田街道を南へ約500メートル、大石橋交差点を東(左折)へ九条通りを約500メートル

無料シャトルタクシー運行のご案内【JR京都駅八条口⇄病院(地下鉄九条駅経由)】

	八条口発 病院行き	病院発 八条口行き
始発便	7:45 次発 8:10.以降30分間隔で運行	9:00 以降30分間隔で運行
最終便	16:10	16:00

※12:40八条口発の便は運行していません。 ※12:30病院発の便は運行していません。
※交通状況により時刻に遅れが生じる場合があります。
※運行は平日のみとなります。土・日・祝日等病院の休診日は運行いたしません。
※定員9名のため満員の場合は次の便をご利用ください。

京都第一赤十字病院

京都市東山区本町15-749 TEL.075-561-1121

地域医療連携室 【直通】TEL.075-533-1280
FAX.075-533-1282



京都第一赤十字病院

日本赤十字社

人間を救うのは、人間だ。Our world.Your move.



京都第一赤だより



人道と奉仕の赤十字精神に基づき、
患者さまにとって安心できる
適切な医療を行ないます。

春号

2023年5月発行
vol. 87

Contents

- 就任のご挨拶 2, 3
- がん診療連携ワークショップ開催報告 4
- 看護フォーラム開催報告 5
- 第26回 東福寺消化器フォーラム 6, 7
- 副院長退任のご挨拶 8

平素、皆様方には多くの患者様をご紹介いただくとともに、転院・逆紹介につきまして多大なるお力添えを賜り、誠にありがとうございます。

さて、若葉芽吹く季節となりました。この春は当院でも多くの新卒職員を迎えましたが、彼らの学生生活の半ばは、新型コロナ禍にあって制約の多いものでありました。講義はリモート中心、実習機会は縮小され、一時は教員や学友と直に接触することすら叶いませんでした。病院での患者様への医療・看護をはじめ、医師から事務に至るまで職員同士の関係構築など様々な不安を抱えての入職であったかと思えます。人がいてこそ成り立つ病

院でありまして、将来、病院運営の中心を担うべき彼らの成長を見守りつつ、しっかり手助けしていきたいと考えています。

この5月8日からは感染症法上の位置づけが5類に移行し、本格的なウィズコロナ社会へと踏み出します。しかしウイルスが死滅したわけでもなく、さらには医師の働き方改革をはじめ課題は山積しておりますが、新卒者含め職員一丸となって対処し、地域の皆様により一層信頼される基幹病院目指して取り組んでまいりますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。

事務部長 綾城 義治

就任のご挨拶

Assumption
of office greetings

greeting 01



副院長

大澤 透

令和5年4月1日付で副院長を拝命しました整形外科の大澤透です。連携先の医療機関の皆様には、以前より多大なご支援をいただき深く感謝申し上げます。平成3年に京都府立医科大学を卒業し、済生会京都府病院、府立医大附属病院を経て平成13年7月より当院に赴任し約21年が経過しました。脊椎外科医としてのライフワークを継続しながら、副院長としては手術室運営、医療情報管理、医師診療支援、病院機能評価、働き方改革などの業務に関わっています。中でも京都市南部での高度急性期医療機関としての手術室運営は、2030年医療需要ピークに向けて、当院の生き残りをかけた重点領域と認識しています。ロボット手術の適応症例数は増加し、複数の外科用口

ボットの確保が今後必要となる予想です。既存の手術室、手術枠ではこれらの症例を受け入れることが困難となってきており、本問題への対応が急務となってきています。さらにハードの整備とともに、働き方改革を踏まえた多職種参画によるチームビルディングが必要です。特定看護師の養成、そして臨床工学技士においては清潔術野での補助業務、手術準備、スコープオペレーターなどへの業務拡大が望まれます。多職種チームが連携して活動を行う場合に、各職種の業務の間には必ずグレーゾーンが存在します。私はこの職域間の隙間をお互いが埋め合わせる連携こそが、チーム力を高める要素と考えています。引き続き皆様方の御指導のほどよろしくお願い申し上げます。

Toru Osawa

greeting 02



院長補佐

上島 康生

令和5年4月1日付で院長補佐を拝命した上島康生です。昭和61年に徳島大学を卒業後、京都府立医科大学第一外科学教室に入局し、平成4年に京都第一赤十字病院赴任、当初消化器外科を担当しましたが、平成7年に国立がんセンター中央病院（現在の国立がん研究センター）で呼吸器外科を研修した後、呼吸器外科を担当してきました。院長補佐としての担当業務は医療安全です。医療安全につきましては、今まで院内の医療安全に関する業務、他院の医療事故調査委員などを経験してきましたが、今回医療安全管理の統括責任者となり、身の引き締まる思いです。

医療安全は医療の質に関わる重要な課題であり、安全な医療の提供は医療の基本となるもので、しっかりとした医療安全管理がされていない病院とは地域連携はできないと考えます。患者さんの安全を最優先とする安全安心な病院を目指し、信頼して当院と地域連携をしていただけるように、できる限りの努力をする所存です。ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

Yasuo Ueshima

greeting 03



循環器内科／部長

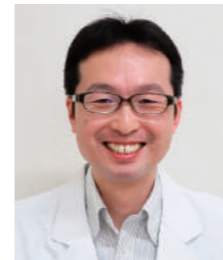
兵庫 匡幸

平素は当院と連携をお取りいただき誠に有難うございます。4月より循環器内科部長を拝命致しました、兵庫匡幸と申します。私は2004年に当院循環器内科に赴任し、以後18年間、主に動脈硬化性冠動脈疾患や心不全、睡眠時無呼吸症候群を専門に診療に携わってきました。医療を取り巻く環境が年々厳しくなるなか、前任の沢田尚久副院長より舵取り役のバトンを受けた形です。人生100年時代といわれて久しいですが、病気を患っておられる高齢患者さまの生活の質は必ずしも高いとは限りません。私はその質にもこだわって、患者さまの健康寿命を延ばすことに尽力し

たいと考えております。できるだけ長く、明るく笑顔で、生きがいを感じながら過ごしていただきたい。そう願っております。しかし、実現するためには救命処置や高度急性期医療のみならず、一次予防や心臓リハビリテーションが重要であることは言うまでもありません。地域の先生方との協力体制が必要不可欠なのです。大切な患者さまをぜひ当院にご紹介いただき、今後とも変わらぬご支援ならびにご指導を賜りますようお願い申し上げます。

Masayuki Hyogo

greeting 04



循環器内科／副部長

木下 英吾

このたび循環器内科副部長を拝命致しました。2002年に京都府立医科大学を卒業し、同大学附属病院、関連病院での勤務を経て、2014年より当院に勤務しております。

当院は救命救急センターを有する地域医療の基幹病院であり、救急医療において循環器は不可欠な診療分野の一つと認識しております。このたびはその責任ある立場となり、非常に光栄且つ身の引き締まる思いを感じています。

これまで虚血性心疾患、心不全を中心に循環器内科一般診療を行ってまいりました。2021年からは心アミロイドーシスに対する診療にも取り組んでおりま

す。これからも自己研鑽を積み、自分自身のみならずチームとしても患者様、各診療科ならびに地域の先生方のお役に立てるよう励んでいく所存です。循環器内科診療の肝となるカテーテル治療においては患者様のメリットとリスクを常に念頭に置いて、薬物による保存的治療も含めて最適な医療を提供できるように心掛けて参ります。

私が医師となってからこの20年間で循環器診療は多岐にわたる分野において発展し続けています。末梢動脈疾患、不整脈など他のspecialistsと共に地域医療に貢献できるよう努めて参ります。今後とも何卒宜しく御願ひ申し上げます。

Eigo Kishita

greeting 05



循環器内科／副部長

中川 裕介

4月1日より循環器内科副部長を拝命いたしました中川裕介です。2002年に関西医科大学を卒業後、京都府立医科大学旧第二内科に入局しました。同附属病院とJCHO神戸中央病院で内科診療の基礎を学び、京都中部総合医療センターを経て大学院へ進学、血管石灰化機序の解明をテーマとした基礎研究に携わる機会を得ました。その後4年間、明石市立市民病院で循環器内科医として地域医療に従事し、2015年より御縁があり当院へ着任しました。

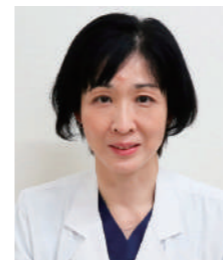
学生の街といわれる京都は今や世界的観光都市の側面を持ち、街では若者や外国人観光客を目にする

機会が増えたように思います。しかし住民の高齢化はこの京都においても例外ではなく、お年寄りの患者様が増えたことを日々実感します。循環器疾患は高齢者が大半であり生命に関わることも多く、質の高い持続的な診療が求められます。そのなかで地域の基幹病院としての位置づけを理解し、常に感謝の気持ちを忘れずに精一杯自身の役割を果たしていきたいと考えております。

今後も皆様のお役に立てるよう努力して参る所存です。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

Yusuke Nakagawa

greeting 06



小児科／副部長

奥村 保子

この度、小児科副部長を拝命いたしました奥村保子です。1997年に名古屋市立大学を卒業後、母校の小児科に入局し、愛知県の病院で6年間勤務しました。その後、2003年に京都府立医科大学小児科に入局し、大学院卒業後の2009年から当院小児科にて勤務させていただいています。早いもので、着任当時小学校1年生だった長女は20歳に、1歳だった次女は中学生となり、家庭でも職場でも人を育てることの大切さ、難しさを実感しています。

岸田総理は2023年の年頭あいさつで異次元の少子化対策を掲げていますが、このコロナ禍で小児科を取り巻く環境は更に厳しくなっています。全国的に小児病棟の閉鎖が相次ぎ、京都市内でも小児科当直と小児病棟が存在するのは大学病院を除き、当院と市立病院のみとなってしまいました。京都で安心して子育てをしていくためにも、当院が京都の小児医療の中心的役割を担えるよう尽力していく所存です。ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

Yasuko Okumura

第25回

東福寺がん診療連携

ワークショップ

開催のご報告



臨床腫瘍部／部長
内匠 千恵子

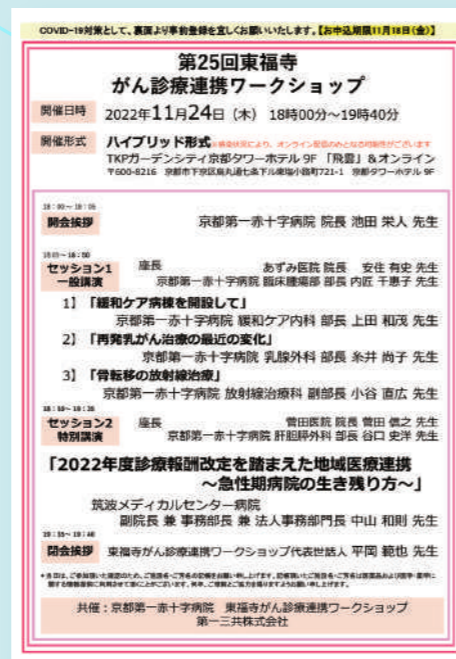
2022年11月24日TKPガーデンシティ京都タワーホテルにおいてハイブリッド形式(前回2021年12月はWEBのみの開催)でがん診療連携ワークショップを開催しました。

今回も約90名の方にご参加いただきありがとうございました。有意義な会になったのではないかと思います。

一般演題では、緩和ケア内科部長の上田和茂先生より「緩和ケア病棟を開設して」ということで2022年4月から本格的に稼働を始めて約半年間の実績について、乳腺外科部長の糸井尚子先生より「再発乳がん治療の最近の変化」ということで、抗体薬物複合体の使用実績を中心に最近の治療について、放射線治療科副部長の小谷直広先生より「骨転移の放射線治療」ということで最近の照射治療の

適応や方法について発表をしていただきました。特別講演では筑波メディカルセンター病院副院長兼事務部長兼法人事務部門長の中山和則先生をお招きして「2022年度診療報酬改定を踏まえた地域医療連携～急性期病院の生き残り方～」をご講演いただきました。病院完結型から地域完結型へ今また新たな病診連携時代になってきていることを痛感しました。

東福寺がん診療連携ワークショップは、今後も最新のがんの診断や治療の情報をお届けしながら、地域医療や在宅医療を踏まえたがん診療連携のあり方を地域の皆様と共に考えていく会にしていきたいと思ひます。



2022年度

看護フォーラムを振り返って

看護副部長
田中 由美子

2022年12月10日(土)看護フォーラムを実施致しました。約3年にわたる新型コロナウイルスの猛威の中で、いろんな医療現場で感染症対策に取り組んできた情報の共有や課題について考えたいという目的で、「地域で考えるCOVID-19対応と課題 ー感染症と共存するためにー」をテーマとしました。今年度もZOOMによるリモート開催で81名の方に参加していただきました。また、パネラーとして、COVID-19感染している患者さんの訪問看護を継続している訪問看護ステーション神川の朴美紀様、アフターコロナの患者さんを受け入れている久野病院のMSW竹内千裕様をお迎えし、本院の退院支援課瀬戸師長と共に、それぞれの立場から現状の紹介をしていただいた後、パネルディスカッションを行いました。ZOOMで参加していただいた他病院や他施設の方からの事前アンケートより、ゾーニングや場面に合わせたPPEについてのご質問があり、本院

の感染管理認定看護師の山城師長に回答してもらい、今後の感染管理についての情報共有や問題解決をする機会となりました。

今回のテーマは、どの施設も自身の感染予防をしながら患者さんに関わるということで、自分たちの実践している対応が良いのか、それとも改善が必要なのか迷いながら感染管理に努めていたという思いをもって聴講された方もおり、参加者の関心も高く意見交換も活発に行うことができました。

今後、コロナ前の状況に少しずつ戻っていくことは予測できますが、患者さんが安心して地域に帰れるよう支援の継続は必要であり、参加していただいた病院、施設も含め地域との連携を強めていきたいと思ひました。

今回、参加していただいた皆様、大変お忙しい中ありがとうございました。

東福寺消化器フォーラム

「消化器疾患のトピックス」

消化器内科／部長

佐藤 秀樹 奥山 祐右

第26回東福寺消化器フォーラムが3月16日(木)に当院多目的ホールで開催されました。当院の多目的ホールからの発信としましては昨年に続き2回目、地域連携室と協力し、当院自前の設備を用いてweb発信を行いました。参加者は99名(院内51名、院外48名)と昨年の91名を上回り多くの方々にご参加いただきました。

今回のテーマは「消化器疾患のトピックス」と題し、消化器内科、消化器外科、開設1周年が経ちました緩和ケア内科から講演を行いました。会の途中ZOOMの不備によりまして一時講演が中断しましたことをお詫び申し上げます。この企画をサポートいただきました地域連携室をはじめとする事務の方々、共催に御協力をいただきました東山医師会の方々に深く感謝申し上げます。

なお、今回は令和5年10月頃に予定をしております。消化器分野における興味深いテーマを取りあげ、魅力あるフォーラムとなるよう準備をする予定ですので、是非、ご参加いただきますようよろしくお願い申し上げます。

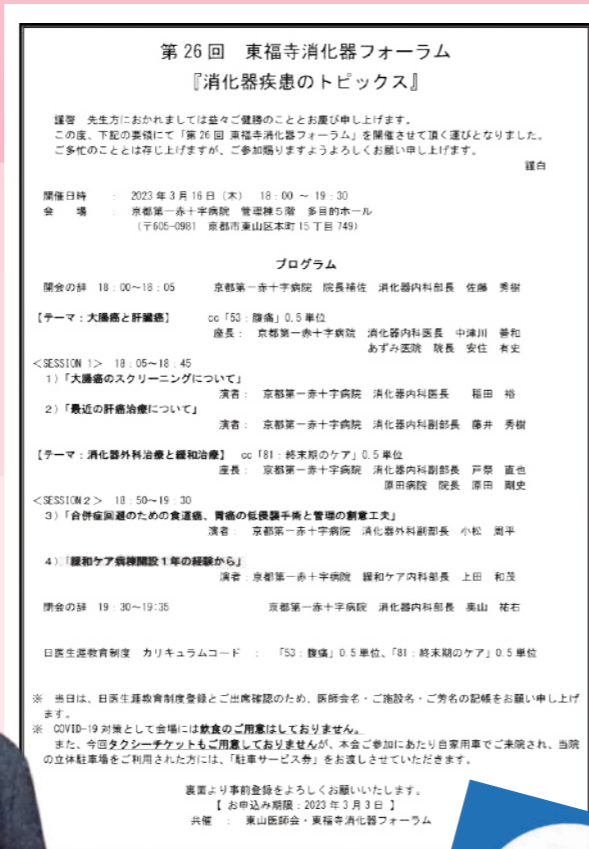


写真 奥山先生

写真 佐藤先生

【テーマ：大腸癌と肝臓癌】

大腸癌のスクリーニングについて

消化器内科 / 医長 | 稲田 裕



新型コロナウイルスのパンデミックにより大腸癌スクリーニングとしての大腸内視鏡検査受検者数も大きな影響を受けている現状があります。大腸癌検診においては、適切なタイミングでのスクリーニング検査が重要であり、便潜血検査は非接触という意味で、パンデミック下でも継続可能な方法としてその有用性が見直されるべきです。さらにひとたび便

潜血検査が陽性となっても、その4割近くが二次検査としての大腸内視鏡検査を受けていないという現状があり、こうした陽性放置者への適切な受診勧奨が重要と考えております。特に遺伝性大腸癌を疑う家族歴を有する患者さんや、糖尿病患者さんにおいては大腸癌の罹患率が高いことが報告されており、積極的な検診が求められます。

最近の肝臓治療について

消化器内科 / 副部長 | 藤井 秀樹



広く肝臓疾患に取り組んでいますが、その中でも肝臓癌は大きな比重を占めています。ウイルス性肝炎の大部分が制御・治療できるようになったため、肝臓癌症例自体は減ってきていますが、脂肪肝・アルコール性肝硬変からの発癌はサーベイランスが難しいことから手術・TACE・RFAなど局所治療・根治治療が難しい、進行して見つかることも多いで

す。2009年に肝臓に対する全身抗癌剤としてソラフェニブが使えるようになったのち、10年ほど新規薬剤がなかったのですが、2017年から新規のTKIやICIがつつぎつつぎ使えるようになり、大きく様変わりしました。効果は高いものの、従来の殺細胞性抗癌剤とはかなり異なる副作用もあり、内科のいろいろな科に協力を仰ぎながら治療をしています。

【テーマ：消化器外科治療と緩和治療】

合併症回避のための食道癌、胃癌の低侵襲手術と管理の創意工夫

消化器外科 / 副部長 | 小松 周平



日本は超高齢化社会であり高齢者の増加に伴い消化器癌患者数は依然高値を推移しています。当院では、高齢の患者様にも安心して手術を受けていただくために様々な治療の創意工夫を行い国内外に報告してきました。近年では、術後肺炎等の合併症予防に有効な超低侵襲手術である、

開胸・経胸腔操作を行わない鏡視下縦郭鏡手術による食道癌根治手術(60例)、ロボット支援下胃癌・食道接合部癌手術(140例)を標準術式としております。また、術後体重減少・体力低下予防のための在宅夜間経腸栄養を導入し、多くの高齢の患者様に安全に手術を行っています。

緩和ケア病棟開設1年の経験から

緩和ケア内科 / 部長 | 上田 和茂



2021年12月に緩和ケア病棟を開設し、コロナ禍で閉鎖を余儀なくされた期間を除くと実働1年が経過しました。再開後の2022年5月から2023年1月までの平均病床利用率は67.6%、平均在院日数は25.2日となっています。患者さんの転帰では、74%の患者さんが死亡退院されており、一時的にせよ自宅に退院された患者さんは20%でした。今後も前方連

携で本院に紹介いただいた、がんの患者さんを、治療および緩和ケアからホスピスケアに至るまで切れ目なく診療し、自宅に帰りたいという希望があれば、在宅緩和ケアと緩和ケア病棟の双方向性の連携を推進して、希望を叶えることができるような運営をしていきたいと考えています。